ほたる

きよき小さき
橋のたもとの
ほたる飛びかふ
みやこに知らぬ

聲もしどろに
五人みたり
ほたる來よこよ
つめたき水も

露けきあまき
さびしき野邊は
花さく園に

つねを

里川の
夕ぬぐれ
うす闇の
すゞしさを

うたひゆく
子供等と
やよほたる
こゝにあり

草もありと
星にまかせ
つどひきて

あそぶ木かげに　月いでぬ

一朝の樂しみ

楓

八月一日朝まだき、一年中の骨やすめにと、古郷の家にある私の、他に爲すべき務もなく、否なきにあらねと、朝な〳〵四人の弟をつれては山又は海の邊をそゝろあるきする、これせめては身体の健康にもと心掛けたのである。今朝しも下り松に出かけた、此處は大坂通ひの漁船の着く處で、丁度下り船かあると見えて、二三輛の車か別に着きせず、石斗りの道をごろ〳〵とねむげな目をして、揖捧につかまる東夫は、問屋の方にゆいた。

海は一面の潮きりで、遠きも近きも淡き衣を被つたようにとんやりして居る、滿ち來る潮は幾千

の小波となりてさわかぬほとに汀を洗ふて居る、海の果、丁度雲と接する處あたりに、今しも太陽か昇つたと見え、所在は分らぬか一面紅く色とりて、もやを被つた向ふ岸の人家は、淡墨を流した樣にぼんやり黑すんて、恰も着物の裾模樣にもと思つた。足許の夏くさは、露を帶んだまゝいろ〳〵に咲きみたれ、そよ吹く風になひいて居る、右手の畑は一面の小豆の花が淡すみれ色に咲き匂ひ、我をむかへて笑める樣に見える、見下す磯には主なし小舟か三そう波のするかまゝに身をまかせて居る。一年ぶりにて此の美しき景色に醉はされ、幼き折此處に遊ひしことなと交々思ひ出てゝしはし我にあらさりし刹那、何處ともなく瀧笛の音が　ブーブーブー

思はす我に返つた折しも、一人の弟が

お姉さん瀧笛はなりましたが、船体か見えません。

今一人の弟を促して小高き處に登り、樣々の事をして見んとするさまが、丁度小兵士か斥候となりて敵艦をでも探すように見えた、笑める私は如何に骨折つたとて、もやの晴れぬうちは見えぬことを覺した、それから四人をせき立てゝ萩の花、水ひき、川きくなと種々の花を折つて問屋まて進んたが、船はとう〳〵何か分らなかつた、その間に二むれ三群の海水浴の歸りに遇つた、其中の一人は、私と小學校を共にした人で、今は三人の子の親となつて居る、伯父にも遇つた、兎角する間に日も高く昇つたから、暑くならぬうちと五人連れでかけて歸り、朝飯を終るときに時計を見たら午前七時てあつた。